<table>
<tr><td>名　称</td><td colspan="3">テント設営法</td></tr>
<tr><td>内　容</td><td colspan="3">「火の熾し方」と同時に、薪を手頃な太さに割る「ナタの使い方」を説明。</td></tr>
<tr><td>目的・ねらい</td><td colspan="3">◇キャンプ中の宿泊施設となるテントを班員と力を合わせ、自分たちの手で設営する。
◇キャンプの基本となるロープワーク（2種類）をマスターする。
◇「説明を聞き、実施する」というキャンプ生活の基本を体験する。</td></tr>
<tr><td>実施場所</td><td colspan="3">◇天候により、ドーム、もしくはテントサイトを選択する。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">スタッフ人員</td><td rowspan="2">準備時</td><td>4名以上</td><td>テントサイトの位置決め</td></tr>
<tr><td>2名以上</td><td>テント及び付帯備品数の確認</td></tr>
<tr><td>実施時</td><td>チーフ1名
補助3名</td><td>見本として1張り設営する場合</td></tr>
<tr><td>準備用品</td><td colspan="3">《位置決め》メジャー（歩測で代用可）、目印となるポール（杭）、
唐鍬、木っ端（ガタツキ直し用）、ナタ
《テント設営時》参加人数に対応した「テント」「土台」「グランドシート」</td></tr>
<tr><td>準備手順</td><td colspan="3">◇草刈り：事前に草刈り機で対象エリアの草刈りを行う。
◇位置決め：何張りのテントを設営することになるのかを把握し、前後・左右の間隔を配慮し、目印となるポールを立てる、もしくは土台となる「すのこ」を設置する。
◇ドーム内に「テント」「グランドシート」「床板」の使用数を把握し、わかりやすく並べる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">実施手順</td><td colspan="3">◇事前に「テント設営の基本」をレクチャーする。（塾長より）
◆テントの種類・役割
◆テントを設営して良い場所・悪い場所
◆雷への配慮
◆その他
◇以下の要領で指導を行う。</td></tr>
<tr><td colspan="2">テントの確認</td><td>1. テントの備品には何があるか、実際に袋から出しながら説明する。
2. 各備品の特徴・役割・個数を説明する。
3. 特に「ペグ19本」「張り綱8本」の個数は、開封時に確認することを徹底。（不足の場合は、充足数を配布）</td></tr>
</table>

	設 営 法	設営手順に従い、説明を行いながら実際にテントを設営。 【張り綱の結び方】 ◆「ひきとけ結び」「自在結び」の仕組みを説明。実際には「ひきとけ結び」のみ、作業中に各班のリーダーから指導してもらう。「自在結び」は必要に応じて体験させる。 【ペグの打ち方】 ◆ペグを打つ場所、テントとの位置関係、打ち込み角度などを説明。
	設営終了後	1. 説明書、ペグ袋、支柱袋を専用バックの中に戻し、テント内で管理するように指導。 2. テント内が砂などで汚れている場合は、専用のほうきで清掃。 3. 寝具の配布後、各自の荷物を搬入。
参加者の持ち物・服装	帽子、軍手、長ズボン	
留意点	◇キャンプ場到着後に行われる最初の活動である。これから始まるキャンプ生活への不安を取り除き、期待を膨らますためにも、すべての班員が作業に携わることができるように指導する。 ◇設営するのは原則的には参加者である。リーダーは次に行われる作業・手順、必要な技術を指導・補助する役割である。 ◇説明が長くなり、実際の作業時間が少なくならないよう、工夫する。 ◇雨天時の設営は困難であるため、ドームで設営後、移動させることもある。	
安全管理	◇全員一斉の作業になるため、他の班員の動きに注意。 ◇土台となる「すのこ」「床板」を移動させる場合は、必ず安全を確保できる者が付き添う。参加者には、軍手を着用させる。 ◇テントの支柱となるポールが長いため、自分の班だけでなく、隣の班への配慮も欠かさない。 ◇キャンプ場での最初のプログラムとなるため、家からの長距離の移動に伴う疲労に加え、炎天下での作業となる場合もあるので、参加者の体調変化には十分な注意を払う。	

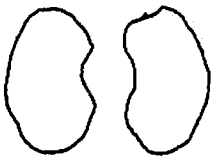
名　称	野外技術講座 「ナタの使い方」		
内　容	「火の熾し方」と同時に、薪を手頃な太さに割る「ナタの使い方」を説明。		
目的・ねらい	◇炊事を行う際、手頃な太さの薪を作るために、ナタは必須の道具である。基本的なナタの取り扱い方を説明すると共に、間違った使い方をしたときは、非常に危険な道具であることを理解させる。 ◇道具を正しく使うことの重要性と大切に使うことの意義をわかりやすく説明する。		
実施場所	◇天候により、ドーム、もしくは炊事場テントを選択する。		
スタッフ人員	準備時	1名以上	◆見本用の薪セットの用意（様々なサイズを用意）
	実施時	1名以上	◆塾長と共に、「ナタの使い方」等を説明。
準備用品	◇薪セット一式		
準備手順	◇薪は「ナタの使い方」の際に実際に割るので、手頃な物を選別しておく。		
実施手順	◇以下の要領で「ナタの使い方」指導を行う。		
	ナタとは	◆ナタは薪を割る道具である。木を切る道具ではないことを理解させる。（キャンプの場合、木を切るのはノコギリである。）	
	ナタの怖さ	◆ナタは他の刃物に比べて非常に重い道具である。したがって、万一ケガをした場合は、想像以上の重傷になることを説明。最悪は「腱」を切断してしまい、一生後悔することになりかねない。 ◆そのため、ナタを持つ手は滑らないように「素手」であるが、反対の手には軍手を二重にすることを徹底させる。（軍手を二重にしてもドンとあたれば、血が出ます。） ◆周囲の人間への配慮として以下の点を説明。 →重い道具である故、すっぽ抜けることも考え、正面に人がいないことを確認する。 →土台には、厚い木を使用し、石やブロックは使用しない。破片が飛んだり、ナタの刃がかけることがある。 →割れた薪が左右に飛び散ることもあるので近くに人がいないことを確認。 →ナタを使っている人の後方に立つと、振り上げたナタがぶつかりケガをすることも考えられるので、絶対に後ろからのぞき込まない。 →要するに、周り人が居ない場所でしかナタは使えないのです！	

	ナタの使い方	◆ナタを持つ手は「素手」、反対の手には軍手を二重にすることを確認。 ◆土台には厚い木を使うことを確認。 ◆薪を割る方法として、次の2つを説明する。 《第1の方法》 1. 薪にナタをあて、一緒に振り上げる。(薪からナタは離さない) 2. 振り下ろした瞬間、薪から手を離す。 《第2の方法》 1. 細い木で薪を支える。 2. 薪を目がけてナタを振り下ろす。(手前に振り下ろすと足にあたることがあるので注意) 3. 上手く薪にあたってナタが食い込んだら、両手でナタを持ち、薪を割っていく。 ◆割りやすい薪を選ぶこと。根に近い部分や大きな節がある薪は避ける。大きな力が必要になるため、危険でもあるし、道具を傷めることにもなる。 ◆正目の薪にも関わらずナタが食い込んでしまった場合には、2人で協力して割る方法もある。
	使用後	◆使い終わったナタは、さやに納め、各班で決めた所定の場所に戻す。決して直接地面に放置しない。 ◆地面に放置すると、蹴って自分の足をケガするだけでなく、他の人に危害を加える恐れもある。また、錆びの原因となり、道具の寿命を短くすることにもなる。
参加者の持ち物・服装	軍手、長袖、長ズボン	
留意点	◇非常に危険な道具であるため、責任を持った取り扱いが出来るよう、参加者の意識を集中させることが必要である。 ◇キャンプ中に発生する大きな怪我のほとんどが、この「ナタ」によるものである。しかし、上記の使用方法を遵守する限り、怪我の発生は防げるはずである。怪我が発生するのは間違った使い方をした場合とリーダーが眼を離した場合のみである。細心の注意を払うことが必要である。 ◇すべての木がナタで割れる訳ではない。太い薪は「斧」でないと割れない場合がある。リーダー体制に余裕があれば、上級コースとして「斧」を使用させることも考えられる。→無理な挑戦は避けるべきである。	
安全管理	◇ナタは非常に危険な道具である。よって、充分なスタッフが確保出来ない場合は、使用を制限させることも必要である。(使用場所を限定する。使用させない。など) ◇ナタは、薪を割る以外に、枝を払ったり、立ち木を切る道具として使用するが、キャンプでは「薪を割る道具」として紹介することが望ましい。キャンプの短期間では、その技術をマスターすることは困難である。 ◇万一、ナタでケガをしてしまった場合には、応急処置の後、病院への搬送が必要となる可能性が高い。事前に病院への連絡方法を調べておくだけでなく、キャンプ実施期間を搬送予定先の病院へ連絡し、対処法などについて打ち合わせを行っておくことが重要である。	

名　称	野外技術講座「火の熾し方」		
内　容	塾長の「火の話」を導入にして、実際の「火の熾し方」の技術をマスターする。 また、それに関連した「薪の選び方・使い方」を説明。		
目的・ねらい	◇火が熾せることは、炊事が楽になるだけでなく、野外活動をより快適に、楽しくする要素を含んでいる。「キャンプに来たんだ。」という実感を味わうためにも、全員が「火熾し」をマスターできるようにする。 ◇「火」という危険を伴うものを扱うことにより、やる気と責任感を養う。 ◇どのような「薪」を見つけ、選ぶことが火を付けるために重要になってくるかを説明すると共に、「薪」も大切な資源であることを理解させる。		
実施場所	◇天候により、ドーム、もしくは炊事場テントを選択する。		
スタッフ人員	準備時	1名以上	◆「火の話」の際に塾長が使う道具セット ◆見本用の薪セットの用意 ◆三脚かまど用の枝・トタン板の用意 ◆移動式カマド：通称ゴンゴンの用意
	実施時	1名以上	塾長と共に、「火の熾し方」等を説明。
準備用品	◇「火の話」の際に塾長が使う道具セット ◇「火の熾し方」の説明の際に使用する備品 →「トタン」「新聞紙」「小枝」「杉の葉」「手頃な薪」 ◇非常用として、水の入ったバケツ		
準備手順	◇講座を行う場所に、上記準備品を用意。 ◇薪は「ナタの使い方」の際に実際に割るので、手頃な物を選別しておく。		
実施手順	◇以下の要領で指導を行う。		
	「火の話」	塾長の進行に伴い、火付け道具の準備を行い、補助をする。	
	「火の熾し方」	説明を行いながら、実際に火を熾してみる。「こんなに簡単なんだよ」というプログラムなので、失敗のないように！ 【要点】 ◆トタン板を使う意味。 ◆土台の作り方。 ◆「火はなぜ燃えるのか？」を資料を使って説明。 ◆火は「下から上に燃える」特性を活かした組み方。 ◆燃えやすい物（新聞紙、杉の葉など）を上手に使うこと。 ◆空気（酸素）の通り道を確保した火の管理。	

	「薪の選び方」	自然塾では、山から自分たちが使う薪を調達することを基本とする。よって、「どのような薪を選べばよいのか」を以下の項目を参考として説明する。 ◆焚き付け用の杉の葉、燃えやすい小枝、ある程度の火力を保てる木というように、様々な太さの木を見つける。 ◆必要に応じて、ノコギリやナタを使い、使いやすい大きさ・太さに揃える。 ◆「乾燥しているもの」を選ぶ。 →乾燥した木：触って温かく感じる。折るとパキッと乾いた音がする。 →湿った木：触って冷たく感じる。折るとしなる。 ◆山から薪を調達する場合、当然ではあるが絶対に立ち木を切らない。
	「薪の使い方」	◆薪も元は山に生えていた樹木である。必要以上に使うことは、資源をムダにすることである。火を付ける時には、他の準備が進んでいるか、確かめてから付けるようにする。「薪」を使うことは、家でガスや電気を使うのと同じように大切な資源を使っているということを理解させる。
	薪の管理方法	確保した薪を湿らないようにする配慮が大切である。以下の方法を参考に、各班で工夫させることが望ましい。 ◆小さなシートに包んで、地面からの湿気、夜露から守る。 ◆使い終わったカマドを利用して、乾燥させる。 ◆次回の炊事がスムーズに出来るよう種類分けをしておく。
参加者の持ち物・服装	軍手、長袖、長ズボン、帽子	
留意点	◇「火を熾す」技術は、決して難しいものではない。コツを修得するまでに、若干の時間が必要なだけである。最初は何回か失敗するかもしれないが、焦ることなく、また面倒がらずに、基本に忠実に何度でも試行することが重要である。 ◇「火熾し」は、マスターすると非常に役立つ技術であると共に、非常に楽しい行動である。したがって、実際の場面では、「できる子ども」が独占してしまうことが多く、意識して指導しないと、体験できない子どもや失敗を恐れて体験することを怖がってしまうことがある。炊事をスムーズに進めることばかりにとらわれるのではなく、学んだ技術を実践する時間との意識を持って、指導にあたることが重要である。 ◇火の扱いに慣れてくると、「火遊び」をする子どもが出てくるので、要注意。 ◇環境問題にこだわり過ぎると、森林を守るため、CO2 削減のためには、薪を使うことは避けるべきだ！となってしまう。しかし、「火の有り難さ」「木を大切に使うことの重要性」を実際に体験によって、理解させることが、より重要ではないかと考える。	
安全管理	◇指導中に大きな火が発生したり、子どもたちに危険が及ぶことは考えにくいが、安全指導の観点から、火を扱う時には必ず「水を入れたバケツ」を用意しておくことを徹底させる。 ◇実際の炊事場面では、火を熾すのに夢中になってしまい、マッチやライターの管理がおろそかになる場合がある。特に火のそばに放置することは、爆発や大きな火を発生させる可能性があるため、管理を徹底させる必要がある。 ◇火を扱う時の服装は、長袖・長ズボンに軍手を着用。髪の長い子どもは帽子を着用させるか、きちんと束ねさせることが必須である。	

名　称	飯盒炊爨（飯盒の使い方）		
内　容	飯盒の機能、飯盒でのご飯の炊き方、取り扱い方を説明。		
目的・ねらい	◇飯盒の機能と共に、正しい使い方をマスターする。 ◇炊事の効率化を図るためのコツを教える。 ◇道具の丁寧な扱いを覚える。		
実施場所	◇天候により、「ドーム」、もしくは「炊事場テント周辺」を選択する。		
スタッフ人員	準備時	1～2名	◇飯盒（2個）用意
	実施時	1名以上	◇飯盒の使い方などを説明
準備用品	◇飯盒2個		
準備手順	◇特に無し		
実施手順	◇以下の要領で指導を行う。		
	飯盒の説明	1. 飯盒は4合までのご飯を炊くことができる。また、ご飯を炊く道具であるだけでなく、米の計量にも使えることを説明。 ◆中蓋　2合 ◆外蓋　3合 ◆飯盒　1升1合（約2ℓ）	
	水の量	1. 米の研ぎ方を説明した後、必ず水を入れることを忘れないようにする。米の合数に対応した水の量は飯盒本体の内側（腹）にある目盛りで計ることができる。上の線は、米4合。下の線は、米2合に対する水の量を示すものである。 2. ただし、標高が高い場所では、水の沸点が下がるため、水が早く蒸発してしまう。結果、芯のある硬いご飯になってしまうため、少し多めに入れるようにする。 3. また、多少柔らかいご飯の方が、慣れないキャンプ生活で疲労し、胃の消化能力が低下している者には適している。	
	火にかける時の注意	1. 中蓋は絶対に使用してはならない。中蓋を誤って飯盒の中に入れたまま火にかけると、時として爆発に等しい蒸気の噴出があり、炊爨に失敗するばかりでなく、火傷の心配まで生じる。	

実施手順	飯盒の並べ方	1．複数の飯盒を火にかける時は、上部より見て図の如く、外側と外側。内側と内側を向かい合わせる様にする。 《理由》火焔がその隙間を通って上昇し、加熱効果が良いばかりでなく、焚火の熱対流を妨害せず、焚火が良く燃える。 
	炊き上がりの識別法	◇飯盒に火が上手にあたれば、約２０分で炊き上がる。以下に炊き上がりの識別法を３つ紹介する。 1．水が沸騰し始めると、水が外蓋の間から垂れ始めるが（多量の場合、焚火を小さくする）、やがて蒸気が勢いよく噴き出すようになる。蒸気が少なくなって垂れていた水が糊のようにパリパリになれば、炊き上がりである。 2．細い枝を素手で持ち、飯盒の蓋にあててみる。沸騰している時はその振動が手に伝わる。振動がなくなれば沸騰が終わったことであり、炊き上がりである。 3．初心者はためらわずに飯盒をカマドより下ろして、外蓋を取って中を点検することが便利である。ご飯の表面に穴が幾つか開いていれば出来上がっている。（飯盒炊爨は一般に米を炊くのと異なり、途中で蓋を取ったぐらいでは炊き上がりには影響はない。）
	炊き上がり後の工夫	1．炊き上がれば、飯盒を逆さにした上、汁の多い草または新聞紙を少し濡らしたもので飯盒の煤を拭き取る。 《理由》飯盒が冷めてからでは、煤は落としづらい。
参加者の持ち物・服装	帽子、軍手、長袖、長ズボン	
留意点	◇キャンプの楽しみの１つである食事に関する技術である。ご飯が上手に炊ければ、おかずが多少不出来でも何とかなるものである。そのため多少説明が長くなってもきちんと伝えることが必要である。そのため、参加者を飽きさせない話法も必要になってくるであろう。 ◇特に注意する点として、（最近は少なくなったが）往々にして飯盒の底を棒などで叩き、炊き上がった飯を下方に落とすと、飯が良く蒸れて炊き上がると間違えて覚えている者がいる。その必要は全くない。飯盒を変型さすだけであるので、絶対に行わせないようにする。	
安全管理	◇説明後、すぐに炊事が始まる。ナタを使う者、薪を取りに行く者、長い木をノコギリで切る者、火を熾す者、材料を包丁で切る者など、いっぺんに危険を伴う作業の開始である。班付きリーダーは班員の役割分担を明確にし、遊んでしまう者が出ないようにすることも大切であるが、班全体を掌握できる位置に立ち、危険を回避する必要がある。 ◇班付きリーダー以外のスタッフも、他に作業がない者は基本的に全員出動である。班付きの眼の届かない所を補い、安全管理を行うことが必要である。 ◇火にかかっている飯盒は言うまでもなく、非常に熱い。にも関わらず、素手で取手を持ってしまい火傷をする者がいる。うっかりミスではあるが、軍手を着用していれば防げる事故である。「火を扱う時は軍手着用！」を徹底させる。 ◇炊事場では、長袖・長ズボンの服装を徹底させる。火傷・切り傷を負ってから後悔しても遅いのである。	

名　称	ナイトハイク		
内　容	小野田塾長のフィリピンでの体験を元に作成されたプログラム。真っ暗な森の中を、微かな明かりを頼りに歩くゲーム。		
目的・ねらい	◇自分たちの秘められた能力に気づくことにより、「頑張れば、できるんだ！」という自信をつけさせる。 ◇暗闇に対する恐怖心を取り除くと共に、懐中電灯に頼る行動を軽減させる。 ◇真っ暗な場所での不安感、仲間と出会えた時の安心感を通じて、一緒にキャンプ生活を過ごす仲間の大切さを理解させる。 ◇火（明かり）の有り難さを気付かせる。		
実施場所	◇ダムの横も向かい側にある森の中のナイトハイク用コース		
スタッフ人員	準備時	2名以上	◆「ケミホタル」をセロハンテープでひもにつなぐ。（黄色14個程度、赤4個）
	実施時	チーフ1名 補　助2名	◆進行及びプログラムの説明を行い、ゴール地点で参加者を待ち受ける。 ◆出発の順番及び間隔を指導する役割。 ◆最初の段差での補助を行う役割。
準備用品	《準備時》スコップ、ナタ（コース確認時の整地用） ひもに取り付けた「ケミホタル」（黄色14個程度、赤4個） 《実施時》説明用のケミホタル、懐中電灯（リーダーのみ）		
準備手順	◇ケミホタル…事前に釣具屋などで購入。サイズは最も小さい20ミリのものが使いやすい。約30センチのたこ糸にセロハンテープで固定しておく。（プログラム当日の夕方に行う） ◇コース確認…夕食前にコース確認すると共に、ケミホタルを設置する。 コース確認は以下の点に注意して行う。 1. スタート直後の側溝に架かっている竹の橋は機能しているか。 2. 最初に右に曲がる地点がわかりやすくなっているか？直進できないように、偽装する必要はないか？ 3. 登り坂に張ってあるロープは、機能しているか？ 4. コース上に歩行の妨げとなるような枝、倒木を取り除く。 5. 立ち枯れしている木があれば、危険を回避するため倒しておく。 6. ゴール後に歩く下りの林道に轍（わだち）がある場合は、整地する。また倒木がある場合は、取り除いておく。 ◇ケミホタルの設置に際しては、以下の点に注意して行う。 1. 暗闇での唯一の目印となるため、できるだけコース上の確認しやすい場所に脱落することがないよう設置する。しかし、かといってあまり簡単に成りすぎることがないように設置する。 2. ケミホタルを頼りにすることにより、危険を招く恐れがないように、様々な状況を考慮し、設置する。（例：崖側には設置しない。曲がり角があるのに設置しない。等） 3. 基本的には前回設置した箇所に取り付けるようにする。		

<table>
<tr><td rowspan="4">実施手順</td><td colspan="2">◇事前に「暗闇の歩き方」をレクチャーする。（塾長より）
◆転ぶことを前提にした歩き方
◆暗い場所でもはっきりと物を見るコツ
◆手、足の使い方
◆その他
◇以下の要領で指導を行う。</td></tr>
<tr><td>内容説明</td><td>暗闇に眼を慣らせる意味からも、キャンプ場を出発し、スタート地点で説明を行う。説明する内容は以下の通りである。
1. 真っ暗な森を歩くプログラムであること。しかし、肝試しのように怖い仕掛けは一切ないことを強調し、「何のために行うのか」という趣旨をきちんと説明する。
2. 目印として、ケミホタルがコースに設置してあるのでそれを頼りに歩くこと。（黄色と赤の違いも！）
3. どのようなコースなのか。
4. 2大禁止事項の説明。
「ケミホタルを取ってしまうこと」
「他人を驚かすような行為」
この2点を守れなかった場合は、危険を伴うと共に、プログラムの目的を達成することができないため即中止とする。</td></tr>
<tr><td>スタート地点</td><td>【スタート間隔】
◆基本は「一人ずつ」「1分間隔」でスタートさせることが望ましいが、参加者数、対象などにより、スタート間隔は変化する。
◆スターターの指示により、スタートする。
◆最初の側溝はたいへん危険なので、補助をする、赤いライトで照らすなどの配慮を行い、危険を回避する。
◆参加者の合間にリーダーが入り、途中の状況を把握する。問題がある場合は、スタート地点、もしくはゴール地点のリーダーに報告する。</td></tr>
<tr><td>ゴール地点</td><td>◆到着する参加者を驚かさないように受け入れ、班毎に静かに待機させ、リーダーが到着次第、人数の確認を行う。
◆最終者が到着後、再度各班の人数を確認。
◆全員が揃ったことを確認し、以下のような指導を行う。

《ゴール地点での指導》
1. 感想を聞く。
2. 小野田さんのフィリピンでの体験を話す。
3. 「最初は出来ないのではないか？と思ったことでも出来ることもある。みんなの中には自分でも気が付いていない能力がいっぱい詰まっている。これから始まるキャンプ生活でも、諦めないで頑張ってみることが必要なんだよ」といった旨の話しをした後、実際に気が付かないうちにみんなの能力がどれだけ凄いことになっているか体験してもらう。
4. ライター1つの炎がどれだけ明るく感じるかを体験してもらう。（炎を直接見ると、眼を痛める恐れがあるので、友達同士で向き合ってもらうようにする。）</td></tr>
</table>

	帰り道	◆ゴール地点からの林道は、全体でつながって歩くか、班ごとにまとまって歩いてもらう。班の団結を図るよいチャンスとする。 ◆アスファルト道に出た段階で、再度人数確認を行う。 ◆キャンプ場までは下り坂。決して走らないように注意する。 ◆もし、星がきれいで、時間に余裕があれば、道路にみんなで寝転がって、星を見るのもよい。流れ星が見えるかもしれないぞ。
参加者の 持ち物・服装	帽子、軍手、長袖、長ズボン	
	注1：懐中電灯は絶対に持参させない。 注2：貴重品、及び不必要なものは持たせない。暗闇なので、落とした物は2度と見つからないと考えた法がよい。	
留意点	◇暗闇に対する恐怖心は、森の中に宿泊する際の妨げとなる。「暗闇でも人間の眼は見えるんだ。」「怖くないんだ。」という想いはその後のキャンプ行動に大きくプラスとなる要素である。 ◇決して肝試しではないことを強調して、人を驚かして楽しむプログラムではないことを、参加者をはじめ、リーダーにも徹底させる。 ◇参加者の間に歩くリーダーであっても、緊急時以外は懐中電灯を使用することは避ける。	
安全管理	◇事前のコース確認が危険回避の大部分を占める作業となる。あらゆる状況を想定して危険を回避するよう努力する。 ◇スタート地点でプログラムの説明を行った後、ゴール地点まで先に歩く事になる。この時は、必要に応じて懐中電灯をつけてコースの最終確認を行う。夕方と夜では状況が変わる時がある。また、ケミホタルの間隔に問題がないかもチェックする。	